

書評

福田正人 著

もう少し知りたい統合失調症の薬と脳

臺 弘

著者は精神科医として脳機能の活動的な研究者であるが、学生や研修医の実習には日常臨床に即して共に学ぶ仕方を強調する人である。この本は、それを当事者や家族、福祉や医療の仕事に携わっている人たち、教育・心理の分野で働く仲間にも広げたいという気持ちから書かれたもので、患者の身に即して書かれているのが尊い。精神病は病識がないのが特徴だといわれるほどに相互理解が難しいものだが、それをなんとか取り戻したい。本書は目次に見られるように、薬が効くとは、薬を止められるか、いつまで飲むのか、薬の効く仕組みは、生活が下手なわけ、と進む。各章は雑誌に連載された内容が下敷きになっていて、それに続いて、総論的な解説で、総合失調症の脳の仕組み、診断と治療の基礎知識、脳の働きとところ、光でところを見る（著者が開発にかかわった脳検査）の諸章がある。

精神科の薬の効き目は飲んでみないとわからない。病原体に対する抗菌剤などと違って、妄想が薬で消えたとしても、治ったからと薬を止めると再発しやすい。評者は初発患者には一応薬を1年間飲んでもらってから止めて、薬なしの1年間も無事なら治療終了とするという姑息な方針をとっているが、服薬10年間で妄想が消えたと言っていたら、「先生が治ったというから」と患者に断薬されて、3か月後に大妄想を再発して入院した苦い経験もある。本書には、薬の効果が脳のどの部分にどのような働きをするかについて、神経伝達物質にかかわる作用であると説明されているが、薬効は患者の個性、経歴、環境などにもかかわる複雑な作用だから、臨床の実際はなかなか難しい。

定型抗精神病薬が外科手術時の自律神経ストレス反応の抑制剤として出現し、覚醒剤への拮抗作用を手がかりに開発されたことは、精神科治療に抗ドパミン作用薬の利用価値を教えたこととして画期的であった。これは幻覚・妄想などの陽性症状を中心に理解されてきたが、意欲の欠乏や感情の平板化などの陰性症状にも改善効果を持つ非定型薬も開発された。それは人当たりの悪さなど微妙な側面にも効果を表す。評者の患者に、月1回の通院で諸定型薬では10年間、寡黙・無愛想の固定欠陥状態を続けてきた女性がある。非定型薬に変えた3月目に「くすりはどこに効くの？」と聞かれた。心ではっと驚きながら、「頭に効く」と答えられたのには、証拠がある。彼女の「バウム画」が常同的な「つつ抜け・萎縮画」から少し伸びやかな木に変わり、人当たりが改善した時期に同調していたからである。

薬は飲む必要があることを、当事者も納得したうえで然るべき状況に適切なやり方で用いることを著者は願うが、評者も心から賛同する。内科の障害には臨床検査の成績があり、脳内出血や梗塞にはCTやMRIの写真があるからわかりやすいが、精神障害はMRIでも統計的にしかわからない。個別例の異常を簡易な客観指標で認めたいものである。妄想や幻覚を自覚させることは難しいが、考えのこだわりや転換の困難なら乱数生成の異常として示すことができるので、服薬は納得される。

(坂本医院)

●四六判 208 頁 2008 定価 1,575 円(本体 1,500 円+税) 日本評論社